



春はそこまで ~蓼科の春を探して~

2月5日(金)。今日は抜けるような青空が広がり、学校も明るい日差しに包まれました。周囲を散歩してみると、まだ冬の景色ながらも、植物は春の準備を着々と進めています。さて、柳田国男の『雪国の春』という本を読んでいると、正月の習俗などから古来日本人は、春の到来をいかに待ちわびていたかがよく分かります。今日は私もその一員となり、小さな春を見つけました。



北は浅間山連峰



南は蓼科山



冬の枯野でも



オオイヌノフグリが咲いてます



菖蒲の芽も顔をのぞかせてます



バラもこの通り



梅もスタンバイ OK のようです



ドウダンツツジもいい感じ



トンビも楽しそう



本邦初公開

困ったお話(その24) (さなだぢゃ!)

高校受験のシーズンが近づいてきた。昨年、学力検査(長野県の高校入試)問題を見ていたときのことだ。国語(古典)で『浮世物語』という江戸時代の笑い話が出題されていた。

「大坂の陣での真田幸村のような牛」という、怪しげな売り手の口上を真に受け、買った農夫が主人公だ。ところが牛は犁を「一歩もひかない」わ、そのくせ人を見るや角でひっ「かけんとする」性悪牛だった。ヘンな牛をつかまされた農夫はカンカンに怒り売りに文句を言ったところ、売り手のペテン師は落ち着き払い、とんでもないへ理屈を言い放つ話である。

困ったことに私は肩を震わせて笑ってしまった。試験会場では悶絶する受験生が出たのではないかと心配をしたほどだ。

昔の日本人が持っていた笑いのセンスは素晴らしいと思う。狂言の「柿山伏」もそうだが、おおらかな昔の日本語がもつ間の絶妙な感覚と、情景が浮かんでくると、おかしさが倍増する。

そこで、その情景をイメージして描いてみたが、どう？

